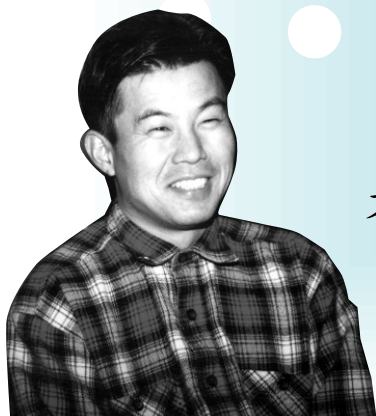


夢追い人

大川市小保800

ナカヤマ木工 中山隆博さん



一言でいえば、ストーリーが語られる家具だと思えます。おじいちゃん、おばあちゃんが使っていた家具を孫が受け継げるのです。オールソ

リッドの家具は、長くなればなるほど深みと風合いが出てきます。アンティークとして価値も高まってくるんですね。



量産家具製造が全盛の大川市で、手作りのカントリ家具で、ユニークな存在であるナカヤマ木工の中山隆博さんにお話を伺ってみました。展示場を訪れてみた。アメリカン、ブリテイッシュ、シェーカーなどのカントリスタイルのオリジナル家具が、約30アイテム並んでいる。素材を生かした風合いのある、本物志向のカントリー家具だ。

隆博さんは、カントリ家具の魅力について、こう語る。「一言でいえば、ストーリーが語られる家具だと思えます。おじいちゃん、おばあちゃんが使っていた家具を孫が受け継げるのです。ペニヤ、ツキ板をフラッシュして作った量産家具では、年数を経るにつれ、いたみ、くすみが目立つようになりませんが、オールソリッドの家具は、長くなればなるほど深みと風合いが出てきます。アンティークとして価値も高まってくるんですね。」

制作方法は、「ホゾ組」でほとんど釘を使わない、昔ながらの手作業だ。法隆寺など建築物もこうした工法を使っている。材料は、北米パイン材、シベリアマツなどで、素材を生かした本格派の家具を作り続けている。仕上げには一つ一つに丁寧にカンナをかけオイルフィニッシュを4回施す。「この工法では、木が呼吸できますから、変化が生じます。表面はアメ色に変わっていき、木目が浮き上がって



いきます。このコントラストが美しさを醸し出しています。」
日本に入ってくるカントリ家具の多くは、高級品でなく、造りが雑なものが多いそうだ。その点、ナカヤマ木工では、日本人の感性に合うように、丁寧な作りに気を使っている。また希望があればオーダーにも応じる。(TEL86-4227)
新作のインスピレーションは、どこから得ているのだろうか。「欧米の雑誌からが多いですね。『FineWoodWorking』、『Country Living』、『Shaker furniture』などはよく見えています。」
隆博さんは、平成6年の2月、突然大病を煩った。ギランバレー症候群という難病だ。3か月間は肺の機能が止まり、人工呼吸器を着けなければ生きられない状態だった。死線をさまよった。しかし、奇跡的に回復し、リハビリ期間を経て今年の5月から工場に復帰できた。「こうして仕事できること自体、贅沢なことだと実感できます。当時の闘病仲間の多くは、いまだに体が不自由のままです。好きなカントリ家具づくりに励める喜びを感じています。」
家具産地大川にあつて、カントリ家具を手がけるナカヤマ木工の存在は貴重である。これからもユニークで価値ある製品作りに励んでもらいたいものである。